

## リディア／主に忠実な者

使徒パウロとその一行は小アジア北西の港町トロアスから船に乗りマケドニアに向けて出発した。翌日無事ネアポリスに到着し、そこからマケドニア第1の町フィリピへと向かった。フィリピは四方を高い山に囲まれた平原にある軍事的に重要な町で、ローマの植民都市であった。

パウロは新しい地に着くと、まずユダヤ人の会堂に行き、福音を伝えるのを常としたが、フィリピにはユダヤ人の会堂がなかったと思われる。安息日となり彼らは祈り場を求めてカンギデス川のほとりに行った。そこで一人の女性との歴史的出会いが起る。歴史的出会いというのは、この女性がフィリピでの最初の改宗者、いやパウロのヨーロッパ伝道の最初の実、最初のキリスト者となったからである。

その女性の名はリディアといい、小アジアのティアティラ市の裕福な紫布の商人でありユダヤ教の感化を受けた異邦人であった。川のほとりで彼女はパウロの語る福音の言葉に耳を傾けていた。ルカはこう記している「主は彼女の心を聞いて、パウロの語ることに耳を傾けさせた」（14節口語訳）。

牧師伝道者として私はいつもこの言葉に慰めと励ましを与えられる。どんなに素晴らしい言葉を語っても、どんなに熱心に伝道しても、人間の巧みな言葉も熱心も決して人を回心させることはできない。それが出来るのはただ人の心に働く神の恩寵のみ業だけである。伝道が息詰まっているように見えるとき、聖霊は私たちの目をこの神の恩寵の働きへと向かわせるのである。

ティアティラの女商人リディアは出張先のフィリピで神にとらえられ、ヨーロッパ最初のキリスト者となった。彼女は自分の家にパウロ一行を迎え入れて彼らをもてなしただけでなく、その家を集会所として提供し（40節）パウロはそこを拠点にフィリピ伝道を展開して行った。それだけではなく、四人の伝道チームが次の町テサロニケに出発した後も、リディアの家の教会はパウロの伝道の働きを支えるために献金を送り続けた。このサポートはパウロの殉教の死に至るまで続けられた（フィリピ4:15以下参照）。

後になって、パウロはローマの獄中からフィリピの信徒たちに宛てて次のように書き送っている。「フィリピの人たち、あなたがたも知っているとおおり、わたしが福音の宣教の初めにマケドニア州を出たとき、もののやり取りでわたしの働きに参加した教会はあなたがたのほかに一つもありませんでした。また、テサロニケにいたときにも、あなたがたはわたしの窮乏を救おうとして、何度も物を送ってくれました」「わたしはあなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一閃のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです」（4:14~16、1:3~5）。

リディアはその信仰の初めから愛と思いやりの深い人であった。彼女の信仰に基づく心づかいともてなしがパウロ一行にとってどんなに有り難かったことか、伝道の旅と戦いによって疲れ切った心身にどんなに素晴らしいいやしを与えてくれたことか。クリスチャンの最も美しい徳として使徒たちが教えていることは他人を思いやる心、もてなす心である（ローマ12:9、第1ペトロ4:9）。もてなすとは愛と謙遜をもって仕えることを意味する。この心は「主への忠実」な信仰から出て来る（16:15）。